

令和 8 年度全国学力学習状況調査結果の分析

国語・数学・英語の学力状況

令和 8 年度全国学力・学習状況調査の結果に基づくと、板橋第五中学校の全体的な傾向は、国語・数学ともに全国平均を大きく上回り、東京都の平均と同等、あるいはそれを凌ぐ高い水準にあります。各教科の具体的な傾向は以下の通りです。

1. 国語の傾向

国語の平均正答率は 69%で、全国平均（63.9%）を 5 ポイント以上上回り、東京都の平均（68%）も超えています。

- ・ 強み：特に「知識・技能」の正答率が 71.7%と非常に高く、全国（64.2%）や東京都（67.6%）と比較しても強みとなっています。
- ・ 課題：「思考・判断・表現」は 66.4%で、全国平均（63.7%）は上回っているものの、東京都（67.6%）をわずかに下回っています。
- ・ 問題形式別：選択式（76.8%）に比べ、記述式（50.7%）の正答率が低くなっており、自分の考えを文章にまとめる力にさらなる伸びしろがあります。

2. 数学の傾向

数学の平均正答率は 62%で、東京都の平均（62%）と同等であり、全国平均（57.0%）を上回っています。

- ・ 領域別の特徴：「数と式」が 70.9%と最も高く、基礎的な計算や概念の理解が進んでいます。一方で、「関数」は 52.9%、「データの活用」は 58.2%に留まっています。
- ・ 評価の観点：「知識・技能」（67.0%）に対し、「思考・判断・表現」は 46.7%となっています。全国平均（39.1%）よりは高いものの、数学的なプロセスを説明する力（記述式 46.7%）の強化が求められます。
- ・ 具体的な正誤：確率の問題（80.4%）などは得意としていますが、2 問ある説明する問題などは正答率が 30%台と低く、無回答率は 30%台と高くなっています。

3. 英語の傾向

英語（3 技能）においても、多くの項目で全国平均を上回る良好な結果が見られます。

- ・ 聞くこと：全体的に非常に高く、特に学校見学の説明を聞き取る問題では 86.7%（全国 76.0%、都 81.9%）を記録しています。
- ・ 書くこと：日常的な話題について事実や考えを書く能力が優れています。例えば、学校での活動を説明する英作文では 50.0%（全国 27.8%、都 37.9%）と、全国や都の平均を大幅に上回る得点力を示しています。
- ・ 読むこと：おおむね良好ですが、社会的な話題について要点を捉える問題（45.7%）など、内容の難易度が上がると正答率が全国平均（47.5%）と同程度、都平均（56.0%）をはるかに下回る傾向も見られます。

総じて、板橋第五中学校の生徒は基礎的な知識や技能がしっかりと定着しており、特に英語のリスニングやライティング、国語の知識面で高い能力を発揮しています。今後は、全教科を通じて「思考・判断・表現」を伴う記述式問題への対応力をさらに高めていくことが、学力向上への鍵になると考えられます。

生活状況と学力の因果関係

令和 8 年度の学習状況調査と学力調査の結果を照らし合わせると、板橋第五中学校の生徒には、「極めて高い学習意欲と家庭学習時間」が「基礎学力の高さ」を支えている一方で、「教科に対する自信の低さ」が「記述式問題への消極性」につながっているという因果関係が推察されます。

詳細な分析は以下の通りです。

1. 家庭学習の長時間化と「知識・技能」の定着

本校の生徒は、全国や東京都の平均と比較して、家庭学習時間が圧倒的に長いことが大きな特徴です。これが、全教科にわたる「知識・技能」の正答率の高さ（国語 82.6%、数学 67.0%）を支える直接的な要因と考えられます。

- ・ 平日の学習時間：1 日 3 時間以上勉強する生徒の割合は 21.7%に達し、東京都（13.1%）や全国（12.3%）を大きく上回っています。
- ・ 休日の学習時間：4 時間以上勉強する生徒は 47.8%と半数近くにのぼり、全国平均（31.7%）を 15 ポイント以上引き離しています。
- ・ 分析：長時間の家庭学習が基礎的な知識の習得や語彙力の向上に結びついており、これが国語の知識面や数学の計算力における強みを生んでいます。

2. 「教科への苦手意識」と「記述式問題の無解答」

学力調査では高い正答率を維持しているにもかかわらず、生徒自身の教科に対する自己評価は驚くほど低いというギャップがあります。これが、思考力を問う記述式問題で「無解答」を選んでしまう心理的要因になっている可能性があります。

- ・ 自己評価の低さ
 - 国語が「得意だ」と答えた生徒は 15.2%（全国 25.5%）。
 - 数学が「得意だ」と答えた生徒は 10.9%（全国 21.7%）。
- ・ 因果関係：実際にテストの結果は全国平均を大きく上回っているにもかかわらず、生徒は「自分ではない」という意識を強くもっています。この低い自己肯定感（自己効力感の不足）が、正解が一つではない記述式問題（数学の動画時間の説明問題など）において、「間違えるのを恐れて書かない」という高い無解答率（最大 39.1%）を招いている一因と推測されます。

3. 学習環境の良さと「主体的・対話的な学び」の成果

学校生活や授業に対する意識は高く、これが「話すこと・聞くこと」や英語のリスニングなどの好成績に寄与しています。

- ・ 対話への積極性：「学級の生徒との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり気づいたりできている」と回答した生徒は 34.8%（全国 25.3%）と高い水準です。
- ・ 学習環境：「自分と違う意見について考えるのは楽しい」と答える生徒が 47.8%（全国 37.4%）おり、他者の意見を尊重する土壌があります。
- ・ 分析：こうした「他者の意見を聴く姿勢」が、国語の「話し合いの内容を捉える問題」や、英語のリスニング（学校見学の説明 86.7%）における全国を大きく上回る正答率の背景にあると言えます。

4. 生活習慣の乱れと認知スタミナの課題

一方で、生活習慣に関しては課題が見られ、これが高度な思考を要する問題への粘り強さに影響している可能性があります。

- ・ 生活の不規則さ：「朝食を毎日食べる」生徒は 67.4%（全国 78.4%）と低く、就寝時刻や起床時刻が毎日一定である割合も全国平均を下回っています。
- ・ ICT 利用時間：SNS や動画視聴などの「スマートフォン等」を 1 日 4 時間以上利用する生徒は 32.6%と、全国（28.8%）よりやや高い傾向にあります。

- 分析：長時間の家庭学習と、ICT 機器利用による夜更かし、朝食欠食などの生活習慣の乱れが、試験後半の難問や記述問題に立ち向かうための「集中力の持続（認知スタミナ）」を阻害している可能性が考えられます。

各教科の学力向上に向けた重点と具体的な指導方法

共通する課題として、全教科で「思考・判断・表現」の観点、特に記述式問題における正答率の向上と無解答率の低下が鍵となります。

1. 国語：記述力と文章構成力の強化

国語は基礎知識が非常に定着していますが、自分の考えを論理的にまとめる力に伸びしろがあります。

- 重点項目：記述式問題、特に文章の要約や、話し合いの内容を踏まえた自分の意見の構築。
- 具体的な指導方法：
 - 要約練習の徹底：文章の「中心的な部分」と「付加的な部分」を区別し、目的に応じて必要な情報を抜き出し、制限文字数内で要約する練習を繰り返します。
 - 対話型の意見作成：話し合いのプロセス（他者の助言や異なる立場）を反映させながら、自分の考えを改善・再構成するワークシートを活用します。
 - 記述の「型」の習得：擬態語の効果や文章の展開の意図を説明する際、どのような根拠を挙げればよいかという記述のパターン（「～という理由から、～といえる」など）を指導し、無解答を減らします。

2. 数学：数学的表現を用いた論理的説明

数学は計算力に優れていますが、図形やデータの活用において「なぜその結論に至ったか」を説明する力が不足しています。

- 重点項目：「思考・判断・表現」を伴う記述問題、特に「関数」と「データの活用」の領域。
- 具体的な指導方法：
 - 根拠に基づいた説明：グラフ（度数分布多角形など）を比較する際、「形」や「位置」といった数学的な特徴を具体的な用語で記述する活動を取り入れます。
 - 証明・説明の方針立て：いきなり解答を書くのではなく、まず「どのような手順（方針）で説明するか」を整理させる指導を重点的に行います。
 - 日常事象の数式化：動画の残り時間などの具体的な事象をグラフや式に置き換え、その結果を再び日常の言葉で解釈し直す「数学的プロセスの往復」を重視した授業を展開します。

3. 英語：社会的な話題の理解と発信力の融合

英語は聞くことや日常的な書くことは得意ですが、より複雑な内容の読解と、それに基づいた意見発信に課題があります。

- 重点項目：社会的な話題に関する「読むこと」と、読んだ内容に基づいた「書くこと（考えとその理由）」。
- 具体的な指導方法：
 - 要点把握のトレーニング：社会的なテーマ（インターネットの使用など）の英文を読み、書き手が最も伝えたい「要点」を短時間で捉える練習を行います。
 - Reading to Writing の強化：読んだ内容に対して、「自分はどう思うか」だけでなく「なぜそう思うか（理由）」をセットで書く指導を強化します。特に無解答率が高い問題については、定型句（I think... because...）の活用を徹底させます。
 - 語彙と文法の活用：「知識・技能」を実際のコミュニケーション（書く、話す）の中でどう使うか、文脈に即した表現方法を指導します。

まとめ

板橋第五中学校の生徒は基礎が非常にしっかりしているため、記述式問題に対して「何をどう書けばよいか」という表現の型や論理構成のステップを具体的に示していくことで、さらなる学力向上が期待できます。また生徒は、真面目に努力し、対話を大切にする素晴らしい資質をもっていますが、「努力の割に自分に自信が持てていない」ことが、応用問題や記述問題への挑戦を躊躇させる壁となっています。今後は、現在の学習成果を正当に評価して自信を持たせることが、さらなる学力向上（特に記述力の向上）への近道になると分析できます。